特110
727
国立国会
51.10.1
図書館

始

特110
727

窓

合組
1 昭和
図書館

室に高窓ありて
東に面す

さやさやにその音ながれつ窓ごしに見上ぐ
れば青葉瀧こそよげり

やはらけき欅のわか葉さざなみなし流れて
窓にそよぎたるかも

晴れし日の机の
上

ふつとして眼につけるかも黒塗の一閑張に
うつれる青葉

置かれたる酒杯のさけにもこまごまと靜け
き青葉うつりたるかな

なみなみと滿ちたる酒をながめつつ時惜む
間も心靜まらず

曇り日の窓

ゆさゆさと搖れ立つ重き葉のひびきうす暗
き窓のうちに聞ゆる

ひこしきり風に吹かれてしなえたるあを葉の蔭のひるすぎの窓

青臭き香さへ漏れ來て曇り日の窓邊のわか葉風立つらしも

風と日光と靜けさ

或時は雨かこも聞ゆ窓押せばかはるこゝなき欅のひかり

眞晝

雀啼くなんこいふそのたのしげのほしいま
まなる啼聲かいま

大樹

さやさやにさやぐ青葉の枝見つつ沖の白浪
おもひるにけり

欅青葉さやける見れば額あけてわれも大き
く眸張るべかり

夏漸く深し

日ごと日ごと黒みかたまる窓の前の欅のわか葉見つつ惜めり

さほり雨

通り雨葉かげにそそぎ朝風のさやぎもつる
る窓邊より見ゆ

夏の疲勞

家の近くに伐り殘され
し楢の林あり

あたりみな鏡(かがみ)のごとき明(あか)るさに青葉(あを)はいま
し搖(ゆ)れそめにけり

青嵐立たむとならし楢の葉のきらりきらり
と朝日に光る

悲しきはわが疲
れなり

いつしんに事を爲さむとおもひ立つそのた
まゆらは樂しきものを

倦怠か疲勞か

こもすれば外れがちなるこころの破目けふ
もはづれて一日暮るる

熱れすぎしいちご林檎のたぐひにや饐えし
欠伸のまたしても出づ

たそがれ

疲れはてて歸り來れば珍しきもの見るごとくつぎふ妻子ら

靜夜

けふもまた誰も來ざりき斯くおもひこころ安らかに戸は閉すなり

夏の東明のたの
しさよ

午前四時五時まだ過ぎずしののめの靄降れ
る間のわれのたのしさ

けだるさを叱り叱りて起き出づるしののめ
の空に靄深く降れり

たりたりの朝寢

あはれはれ雨かも降ると起き出でて見れば
けうさき青葉のひかり

一人の舊友

かかるこさいふべくもあらぬ男より斯くさ
びしげの手紙來にけり

雷を恐る

こかくして朝七時すぎ八時九時過ぎゆくな
べに世はひかりなり

あかつき

竹煮草あをじろき葉の廣き葉のつゆをさけ
つつ小蟻あそべり

或る家の二階

がらす戸にふりかかる雨の三粒四粒かずわ
かずなりて搖るる大枝

木下みち

しつごりと垂れて動かぬ曇り日のわか葉の
枝をくぐるさびしも

夏の朝

朝の街いそぎ通ればをちこちに青葉そよぎ
ゐて酒ほしくなれり

夏の夕

親しさや日ごとつかれてわが通る貧民窟の
夏のたそがれ

わびしき朝夕

父の眼のつめたき光うつつなき兒にもわか
るか見ればさびしけ

いふこゝはすべて空しゝ誓ひつつさりゝて
も身のただにさびしく

池袋村

麥畑のくろにならべる四五本の桃のわか木
に實のなれる見ゆ

何といふ蟲のおほさぞ花しろき大根ばたけ
の土みてあれば

麥ばたの垂り穂のうへにかげ見えて電車過
ぎゆく池袋村

黄楊の木のはなの眞白さうこうこと坂を登

れば植木屋の籬に

妙義山

その日妙義山に志したれど心變り て磯部に泊る

氣まぐれの途中下車して温泉町停車場出れば葉ざくら暗し

眼に立たぬ宿屋さがして温泉町さまよひ行
けば河鹿なくなり

湯の町の葉ざくら暗きまがり坂曲り下れば
溪川の見ゆ

町端れの宿屋に入れば心の疲れ
俄かに身に浸む思ひす

ひこり來てひそかに泊る湯の宿の縁に出れ
ば溪川の見ゆ

溪川の見ゆるうれしみひろびろと部屋あけ
放ち居ればうら寒し

河鹿しきりになく

碓氷川川原をひろみかたよりて流るる瀬々に河鹿なくなり

旅なれぬ身にも
あられぐ

はるかにも來つるおもひの旅心地宿屋の窓
に杉の山見ゆ

その翌朝

川上の妙義巖山白雲のおくにこもりてこの
朝見えず

朝夙く出で立たむと
おもひしが

みなかみの峰にかかれるしら雲のいちじろ
くなりて晝たけにけり

翌々日磯部を出で高原の路を
歩きて妙義山に向ふ

行き行けば青桑畑ひさすぢの道をかこみて
盡きむともせず

みちばたの桑の葉かげに腰おろし煙草すひ
居れば霧降り來る

その山は雲にかくれつ妙義道直きかぎりに
桑畑曇る

このあたりの村すべて
蠶を飼へるにや

妙義道たまたま逢へるいちにんのをんな青
桑を背負ひ急げり

水無月の朝霧寒み戸をおろしこもれる村を
行けば蠶の匂

道漸く山に懸れば霧は雨と
かはれり

道ややに登りとなれば桑畑のをりをり斷え
て雜木の林

はらはらと雜木林に雨來り音あらきなかに
ほとゝぎす啼く

妙義町なる宿屋に雲と雨と
を眺め暮すこと三日間

杉山のわか葉の溪の雨を繁みはるかなるか
もその瀧の音

向つ山杉生のうへに居る雲のなびき動きて
雨降りしきる

ひさしきり明るくなりて降る雨の向つ杉山
雲立ちわたる

僅かの晴間を見てその峰に
登りぬ

雲しろくよぎみ動かぬあめつちの深きがな
かに岩ふみて立つ

秩父嶺のうねりの端か低く見えてただよへ
る雲は四方をこざせり

此處に浮ぶ峰のこがりにわれ居りて見はる
かせば四方を雲こざしたり

雲深くこざせる溪の奥所よりいよいよ冴え
て水の聞ゆる

山を下らむとい
ふ日に

渓々にひそみ静まり白雲のこの朝立たず峰
晴れにけり

渓をおもふ

身の故にや時の故にや此頃おほく
渓をおもふ

疲(つか)れはてしこころの底(そこ)に時(とき)ありてさやかに
うかぶ渓(たに)のおもかげ

何處こはさだかにわかねわがこころさびし

き時に溪川の見ゆ

溪を思ふは畢竟孤獨を

おもふ心か

獨り居て見まほしきものは山かげの巖が根

ゆける細溪の水

巌が根につくばひ居りて聽かまほしおのづ
からなるその溪の音

溪をおもへばわがこころ常に
うるほふ

五百重山峰にしら雲立たぬ日もひびきすず
しきその溪をおもふ

わが居ればわが居るところ眞がなしき音に
出でつつ見ゆる溪川

いろいろと考ふるに心に浮ぶは
故郷の溪間なり

幼き日ふるさとの山に睦みたる細溪川の忘
られぬかも

時としてまた遠き山
をおもふ

わがこころいまは疲れぬ時じくの山の雫に
行きて濡れましを

高山のそのいただきに額あげて風の寒きに
觸れましものを

たのしきはわれを忘れて曉の峰はなれゆく
雲あふぐ時

夜ごならばまた來てやごれしののめの峰は
なれゆく夏の白雲

天そそる峰にたなびきうち凍り峽にたたな
はる夏のしら雲

古句に山高而月小と
かありけむ

さびしさや峰高ければ小さしごひごのいひ
けむその月を見む

さびしき樹木

或夜風冴えて月
清し

うろこ雲空にながれてしらじらと輝けるかげの夏の夜の月

ひさしくも見ざりしごときおもひしてけふ
あふぐ月の澄めるいろかも

見てあれば見てあるほどにうろこ雲ながれ
速みて冴ゆる月かげ

軒端なる欅の並木さやさやに細葉そよぎて
月更けにけり

欅の木の葉を茂みかも月の夜に宿れる風の
聞きのよろしき

或時はひこのものいふ聲かこも月の夜ふけ
の葉ずれ聞え來

或る朝

井戸端にわが浴び浴ぶる水の音水のたえま
に蜩きこゆ

醉ひざめに限るべしやは起き出でて朝井戸
に飲むこの水の味

起き出でて裸足に立てる朝庭の冷き土に媚
ぶるこころか

ひんがしの白みそむれば物かげに照りてわ
びしきみじか夜の月

また或る朝

疲れつつ起き出で來ればみじか夜の月残り
ゐて黍の葉の影

夙く起きて靜かに居れば庭さきの黍の葉ず
ゑの露もまだ散らず

朝起きの眞澄かなしき・わがこころみださじ
ものゝ疲れるにけり

あやふきは黍の葉ずゑのつゆよりも朝げし
ばしのわが靜心

疲れたるひこのみぞ知るしののめの露の干
ぬまのこのたのしさは

朝の漸う深みゆ
くに

此處はなほものかげなれど朝空を輝きてゆ
く白鷺の鳥

あをあをと朝日さしゐて森の奥聲のかぎり
の蜩きこゆ

庭の畑

庭の隅わがつくりたる黍畑にちさき露見え
朝朝晴るる

秋近し

いつこなく黒みて見ゆる楢の葉に今朝ふく
風のあはれなるかも

暫くは世のこゝぐさを思はずてひこりぞあ
らむこの朝風に

窓の眞晝

ふつとして額あぐればわが窓に燃えてのぞ
める花柘榴花

見上ぐれば窓いつぱいの欅の木椎の木の蔭
の花柘榴花

柘榴の花

欅の木椎の木の葉のしづもりの蔭に燃えたる花ざくろ花

見てあれば見てあるほどに柘榴花くれなゐ燃えて枝にそよがず

觸れがたきものにこそあれ水無月の曇りのかげに咲ける柘榴花

汗もいま湧きか止まらむ柘榴花咲きみちて
枝に燃ゆるならずや

たましひよ萎えしこいふな眞夏日のひかり
のなかに柘榴は咲けり

或時はひつそりして葉がくれに悲しめる
ごとき花ざくろ花

日のひかりかげり來れば枝枝の柘榴の花は
搖れてそよげり

窓より大きなる銀杏の
木見ゆ

朝霧のやや晴れゆけば夏の日の青み輝き銀
杏は立てり

濃みごりの銀杏の葉かげこまごまと朝日や
ごりて風そよぐ見ゆ

欅の枝と雀

すずめ子の一羽こまりて啼く見ればあをき
細枝に朝日さゆらぐ

午前

窓漏れてあざやけきかな七月の青きひかり
はわれの机に

眞書

欅の葉ほのかにゆれて窓青みチャルメラの
笛こほく聞ゆる

こほき木に蟬の鳴き入りゆくりなくなり出
でし時計音のわびしも

また或る午前に

枝の葉にやごり輝く夏の日のひかりがなし
きこの朝かな

をりをりにひこみ上ぐれば窓を掩ふ欅の枝
にまだ朝のひかり

午睡

輝きて睡眠は來る午ちかみ窓邊の木の葉照り青みつつ

或る夜

蚊帳のなかに机持ち入れもの書くこ夜を起きて居れば蚊の聲さびし

蚊帳に見ゆる夜ふけの風の冷きにこころ覺め居れば蚊のなく聞ゆ

をりをりに吹き入る風の蚊帳をあふりこころさびしも秋のごときに

いつしかも風ぎぬる風か立ち出でて緣より見れば黑き夜の木木

月夜にはあらねうすらに明りゐて秋めける空にならぶ木の數

いまをかも露のおくらむ夜あかりに長く垂れたる黍の葉の見ゆ

ほぎちかく行ける夜汽車の音すらもなつかしくしてもの書きいそぐ

たまたまに夜半を起きゐてもの書けば夜のめづらしく灯のめづらしく

暁ちかきものの冷かもしみじみと庭のあたりに蟲なきしきる

眠らじとつとめつつとめつ現なく蟲のこゑ聞
けば夜は深からし

額を手にささえてをればそのままに眠らむ
とする夜仕事あはれ

ふとしては蟲かともまがふ夜仕事に疲れて
居ればわれの耳鳴

七月なかば

いま蒔かむものはと問ひて買ひて來し二十
日太根の種をこそ蒔け

二十日大根

二尺づつ角に鋤きたる土のうへにはらはら
蒔けるものの種かも

蒔きてまだ三日もたたぬに黒土にはつはつ
萠えぬ二十日大根は

北國行

板谷峠

おしなべて汽車のうちさへしめやかになり
ゆくものか溪見えそめぬ

たけ長く引きてしらじら降る雨の峡の片山

に汽車はかかれり

いづかたへ流るる瀬瀬かしらじらと見える

てゝほき峡の細渓

院内峠

峡ごしに汽車よりあふぐ高嶺には雲ひかり

ゐて窓に雨鋭し

汽車のうちも光り明るむここちして四方の
雨しるき秋草の原

筋あらく汽車に降り入る山の雨手にもこる
ごこ光りてぞ見ゆ

最上川

最上川岸の山群むきむきに雲籠るなかを濁
り流るる

中高にうねり流るる出水河最上の空は秋ぐ
もりせり

初めて酒田港を見る

ささ舟の鯵つり舟か烏賊つりかわづか群れ
ゐぬ羽後の酒田は

同港滯在

ゆきずりの旅人同士最上川に手洗ひつつ語る妓買話

はるばるゝ羽後の酒田に妓買に來しゝには
あらね來てみれば面白

汽船にて酒田港を出づ

大最上海にひらくるこころには風もいみじく吹きごよみ居り

砂山の蔭に早やなりぬひとのごと別れの惜しき酒田の港

海路

きりぎしの眞下に立てるむら岩に浪はむら
がり沖邊晴れたり

海ぎしの低山に雲のこごりゐて邊浪朝浪あ
ざやけきかも

海上鳥海山遠望

あまたたび見むこはすれご陸のかぎり朝雲

這ひて鳥海山無し

乳こごる濃き雲こけて朝風の立つらしきさ

まや遠き鳥海山

島見ゆ、飛島とか
や

ふと見れば雲のかげなるあはあはしき光の
なかに飛島の見ゆ

晴れたれど暗みをやごす夏の海の沖津邊の
かたに飛島浮けり

飛島の影消えし
ころ粟島見ゆ

いまは早やまさしくなりし粟島の岸に立つ
浪しらじらと見ゆ

飛島と粟島・といふ荒海に飛びてうかべる粟
のごとき島

船上

飛の魚のこびはぬる海の靜かにて船にこもれば船もまた光る

ゆきゆくに沖に浪なく船に音なしさびしけれぞ陸を見て居る

なかば覺めなかばねむりて船に見るここの海ぎしの岩の渦浪

浪しろき岸邊岸邊にそひてゆくひゝ日の船
の乘合の顏

兩眼を見ひらきながらねむり居るごときお
もひを船の上にしつ

ひゝつらに低く見えをる陸のうへのこの國
の山は誰も名を知らず

國人もその名を知らぬ低山の峰こそつづけ
夏雲のかげに

斯くしつつ幾日もゆけど浪のなかのこれの
汽船をいとしく思ふ

沖津邊の浪のかたちに傾きてやかてはなほる
船の上の眞晝

ねころびてせうこともなき船の上のおもひ
にのぼるさまざまの人

身は船にありてふこころも忘れつつもの思ひ
をればさびしうなりぬ

さまざまのひごを思ひ倦み起き直り船より
見たる沖津邊の浪
藍の泡のながれただよふ岩の間の汐のころ
みに魚釣らましを

ざざと引くしら浪の岩に居る鳥の三つ二つ
見えて浪さらに上る

船中獨酌

たへかねてこり出したる酒の壜いまだ飲まねばくちもこに滿てり

近く見え手にもこるべき島山か酒飲みて居れば四方は明らか

ふらふらこ醉かも身には廻るらし甲板の小蔭に酒飲みをれば

斷崖盡きて遠き砂丘起る、地圖
を見れば越後の如し

崖盡きて光り起れる砂濱のひくくつづけり
越後の國は

越後てふ聞のひさしくなつかしき國かも松
の濱見えそめぬ

日没近く佐渡島
見ゆ

羽後の海朝けぶりゐき越え來れば越後の海
は夕けぶりつつ

この海にへなりて浮ける三つの島をひゞ日
の船にゝびゝびに見つ

秋居雜詠

木槿の花

見しこいはば見しにも似たれこの秋の木槿
の花の影のこほさよ

際白く奥むらさきのよき花の木槿おもへば
秋の日かなし

淀の深みにうかべる魚のごとくにて或る日
行き居れば木槿さきゐたり

この年の秋もなかばを過ぎぬるこおもふこ
ころに木槿浮び見ゆ

原

疲れてはひそかに來り草を見るこの荒原の
秋の幾日

櫟の木まばらにならび秋くさの荒れしこの
原ひこは知らなく

失題

新しき世界の見ゆこいふことの言葉ばかり
もかなしきものを

あたらしきわれの踏むべき新しきかなしき
地のまざまざと見ゆ

ここにして身をし淨めよあたらしきわが日
のなかにあたらしく行け

癩病禁酒

底なしの甕に水をつぐごとくすべなきもの
か酒やめて居れば

咳吐かむちからも腹にいまはなし白けから
びて罅入りてあらむ

膳にならぶ飯も小鯛も松たけも可笑しきも
のか酒なしにして

ほほこのみ笑ひ向はむ酒なしの膳のうへに
ぞ涙こぼるる

古川滴泉君より林檎を送られしに
答ふる歌

みちのくの小學校の校長のその妹こ送りこし林檎

山の村の學校なれば晝間こて靜けかるらむ
何してか友よ

年わかく笑みこぼしつつ兒等を見る校長ぶ
りを見に行かないまに

君が頰にをりをりうかぶうなゐなす丹の頰
のふりををりをり思ふ

久しぶりに和田山山蘭君に
寄する歌

ちからなく嘴みてありや腹黒くかまへて居
るかいづれかはいへ

友としてちからを持たぬ時時のわれは見ゆ
らめごうこんずなゆめ
罵るこ汝をする時しみづからのちから危し
こころは冷ゆる

おほよそにおもひ棄つるなひこすぢに思ひ
入りたるこゝは尊し

酒のみのわれこおれこが酒なしに向ひあふ
こゝも或るこき可けむ（彼も亦病めりこか）

福地房志君より鮎を送られしに
答ふる歌

秋山のはざまの溪の瀧つ瀬の出水する待ち
て取りし鮎こふ

たぎり落つる濁りに投げし網のうちに落葉
朽葉こおごりけむ鮎

岩山の黄葉ちり積る溪のおくにいまだ居に
けむこの錆鮎は

落鮎の姿は痩せたれ岩出でて黄葉でし溪を
おもひつつ食ふ

おなじくば汝が古家の大園爐裡かこみて燒
きてさもに食はましを

小河原素山君より松茸を送られし
に答ふる歌

こころごころ赤く禿げたる松山の端山がな
かの友が村の秋

松茸のかをりを嗅げば村住の友がこころに
絡るるおもひす

秋の日はまさしくさして籠りゐの縁の板さ
へそりてぞあらむ

雀雀すずめのなかのただ一羽には庭に降りきて
君が眼めは動うごけ

——なはり——

大正七年七月十九日印刷
大正七年七月廿三日發行

定價金七拾錢

著作者　若山
東京市芝區新網町三十七番地
石川甲作

發行者　東京市本郷區湯島切通坂町五十一番地
加藤晴吉

印刷者　東京市本郷區湯島切通坂町五十一番地
合資會社正文舍

印刷所

發行所　東京市芝區新網町三十七番地　南光書院
振替貯金東京三八〇七九番

●吉井勇先生著●橋口五葉先生裝幀

歌集叢書

第一篇

毒うつぎ

菊半截判箱入
木版手刷美裝
定價金七十錢
郵税金六錢

内容

戀歌 二百餘首

筑紫の旅　馬樂追憶
京戀し　煩惱地獄
涙華の　海の嘆き
ひとへ　新佃閑居
伊勢の卷　戲場小景
山上獨語
わかいのち
昨日今日　寫樂と河豚

東京新堀芝区山七
南光書院
振替東京三八〇七九

Ohdi
P/7

終